



Title	スポーツを手段とする貧困削減への取り組み(3) : オランダ王国の事例から
Author(s)	岡田, 千あき
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2020, 46, p. 23-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スポーツを手段とする貧困削減への取り組み（3） ーオランダ王国の事例からー

岡 田 千あき

目 次

1. はじめに
2. 研究の背景
3. Life Goals Foundation (LGF)
4. 結果
5. おわりに

スポーツを手段とする貧困削減への取り組み (3)

—オランダの事例から—

岡 田 千あき

1. はじめに

スポーツを手段として様々な社会課題の解決を目指す「開発と平和のためのスポーツ (Sport for Development and Peace: SDP)」は、開発学、社会学、教育学、人類学、経済学などの複数分野の知見を取り入れながら急速に発展した。近年では、オリンピック・パラリンピックを始めとした国際競技大会の招致に SDP の要素は不可欠と考えられており、東京五輪を控えた日本でも SDP 関連活動が多く見られるようになった。SDP の拡大がみられるからこそ、多くの「開発」や「平和」の根底におしなべて存在する「貧困」に焦点を当て、手段としてのスポーツの有効性を再考することは重要である。

スポーツを通じた貧困削減を目的とした世界的な活動として、ホームレスワールドカップ (Homeless World Cup : HWC) が挙げられる。HWC は、「ホームレス状態を社会からなくすこと、ホームレス状態にある人々が自らの人生を変えるきっかけを作ること」を目的に 2003 年から毎年開催されているフットサル大会である。2019 年 7 月、8 月にウェールズの首都カーディフで行われた第 17 回大会には、男子 44 チーム、女子 8 チームが出場し、男女ともにメキシコが優勝した。

HWC には、文字通りホームレス状態にある人が参加しているが、具体的にどのような状態にある人を「ホームレス」とみなすかは国によって異なっている。開発途上国のみでなく先進国のチームも多く参加している現状からは、絶対的貧困、相対的貧困の両方を射程に入れて HWC を捉える必要性が認められる。HWC 出場各国には、貧困やホームレス、その他の社会課題に精通するナショナルパートナー (National Partner: NP) 団体があり、各国での活動を統括している。各国で活動を行う NP は、例えば福祉施設であったり、アルコールや麻薬の依存症の治療施設であったり、青少年育成団体であったり、孤児院であったりと、その成り立ちが大きく異なり、政府や地方自治体との関係性、事業の規模、対象者などその中身も様々である。

本研究では、オランダ王国の NP であるライフゴールズファウンデーション (Life Goals Foundation : LGF) の活動を検証する。LGF の活動からオランダの貧困やホームレスにまつわる課題を捉え、それらの諸課題の緩和、解消のために「スポーツ」に期待された役割を探る。さらに、現代オランダ社会における「スポーツ」の存在を社会福祉

との関係から読み解くことを通じて、相対的貧困の緩和・解消に寄与するスポーツの可能性を検討してみたい。

2. 研究の背景

2-1. ホームレスワールドカップ

HWC は、2003 年から開催されているストリートサッカーの国際大会である。①ホームレスワールドカップ基金、②ホストシティとなる市町村、③ NP を始めとした協力団体の三者が大会実行委員会を組織し、2019 年までに世界 16 ヶ所で開催された。HWC には、16 歳以上で過去の大会への出場経験がなく、①大会開催日より 1 年以内に 3 週間以上のホームレス経験がある、あるいはストリートペーパー販売で生計を立てている、② 2 年以内に麻薬やアルコール依存の治療を受けている、③ 1 年以内に亡命したあるいは亡命申請中である、のいずれかに当てはまる者が参加することができる。加えて、NP が、各国の貧困、ホームレス事情に合わせて独自の基準を設けて選手選考を行い、大会開催地に選手を派遣する。HWC から見る NP は、HWC に出場する選手を育成、選抜、派遣する役割を有しているが、多くの NP は各国で独自の活動を行っている。近年では、HWC への選手派遣を活動の一部と位置づけ、より広く事業を展開し、年によって HWC への選手派遣を判断する団体も散見される。

2-2. 研究方法

2019 年 2 月 12 日～16 日にかけて、LGF 本部の所在地であるユトレヒト、オランダの首都アムステルダム、南部の都市ドルトレヒトにおいて調査を実施した。調査は、LGF の活動を担うコーチ計 15 名に対して半構造化個別インタビュー法により、主には英語を用いて行った（2 名については、オランダ語⇄英語の通訳を介した）。全てのインタビュー調査は、匿名で行い、調査の開始時に目的とデータの秘匿に関する説明を行った。また、音声録音とデータの研究への活用承諾を得て同意書へのサインを依頼し、これらを含めた調査時間は平均 26 分であった。

本調査に先駆けて予備調査として、2017 年に上記の 3 都市を訪れ、各地での活動内容、参加者、福祉制度などに関する情報を入手していた。加えて、LGF のスタッフと① 2017 年に HWC 大会会場（2 名）、② 2018 年にユトレヒトに在する LGF 事務所（4 名）、③ 2018 年の訪日時に大阪大学において約 10 日間（2 名）に渡って対話を重ねており、これらを通じてオランダの福祉制度とスポーツ、LGF の事業概要や公的機関との関係性などに関する理解を深めていった。期間を通じてラポールの構築を試み、同時にユトレヒト大学の 2 名の研究者からオランダのスポーツ事情および福祉事情に関する情報提供を受けた。これらを元に LGF の現場で行われている活動に迫るべく、LGF の 2 名のスタッフと共同で本調査の項目を選定した。LGF では、選手を対象とした活動評価をすでに行っており、

データを集計・分析する段階に入っていた。従って、本研究では、将来的に選手の活動評価と合わせた分析を試みることを念頭に、コーチに対する聞き取りを行うこととした。

2-3. オランダの福祉制度とスポーツ

オランダでは、健康・福祉・スポーツ省 (Ministry of Health, Welfare and Sport) がスポーツ政策を担っており、福祉とスポーツの距離が近い。オランダ政府は、1990 年代にエリート育成を主とする競技スポーツ偏重から生涯スポーツの重視へと舵を切り、「2011 年のスポーツ予算は 129 億 6,960 万円であり、その約 68% がスポーツ・フォー・オール関連」(De Bosscher et al., 2015) となった。オリンピック委員会や各競技連盟を中心とした競技スポーツ振興については別稿に論を譲り、本稿では「全ての青少年にスポーツを」をスローガンに生涯スポーツ政策を進めてきたオランダの官民連携の取り組みを検証してみたい。

オランダの人々がスポーツを行う機会は、サイクリングやジョギングを始めとした個人的なものや民間のフィットネスクラブでのトレーニング、およびコミュニティスポーツクラブ (Community Sports Clubs : CSCs) におけるものが中心である。CSCs は、オランダの組織化されたスポーツ実施の中核を担うもので、地方自治体が運営予算の一部とグラウンドや体育館といった場所を提供しており、これらはクラブ専用フィールドや公共施設である。施設の管理とクラブの運営は、会員がボランティアで行っており、各クラブの会員は、会費を支払ってスポーツ実施の機会を得ると同時に、①マネジメント（クラブの運営）、②コーチング（チーム内での指導）、③広報・渉外、④その他の活動（併設するバーの手伝いや清掃など）を通じてクラブに貢献している。オランダでは、「全人口の 3 分の 1 にあたる約 600 万人が何らかのスポーツクラブに参加しており、（中略）2 万 8,000 のスポーツクラブと 88 の団体がオリンピック委員会および競技連盟に加盟している」（山口、2016）と言われており、複数のクラブに所属している者も少なくない。オランダにおける CSCs は、規模の大きなものでは、30 を超える競技別、年代別、レベル別のチームを有しており、「単なるスポーツの場に留まらず、人々が所属するコミュニティの一つとしての機能を有している」¹⁾ と言われている。



写真 1 ある CSC の施設



写真 2 クラブ併設のバー

オランダの福祉政策は、労働関係、青少年育成、高齢者ケア、住居関係が中心であり、地方自治体を主管として、主には半官半民の団体が現場でのサービスの提供にあたっている。近年、一部の自治体において、福祉と CSCs を結びつける試みが活発化しており、その大きな目的は「青少年育成 (Youth Development)」²⁾ である。一部の地域では、ケア・スポーツ・コネクターと呼ばれる人材の活用に踏み切っており、「彼らは社会的弱者のスポーツ参加を後押しするために任用されている。彼ら、彼女らには、主として青少年育成団体と CSCs の連携を推進しファシリテートすることが求められている」(Hermens et al., 2017a)。ここでは、すでに確立されている CSCs の仕組みの福祉への活用が求められているが、実際のケア・スポーツ・コネクターの多くはスポーツ指導者であり、「研修や教育の機会や免許制度がある訳ではないことが課題である」³⁾ と言われている。福祉とスポーツの連携は未だ歴史が浅く、地方自治体と福祉団体の関係性によってスポーツの位置づけは様々である。また、スポーツと福祉の両者を理解しているケア・スポーツ・コネクター、さらには福祉関係の知識や経験を持つスポーツコーチを育成する重要性が指摘されている。

オランダでは、2000 年から 2016 年の間にホームレス状態にある人々が、全土で 74% 増加しており、4 つの大都市にある保護施設が定員超過の状態にあると報告されている⁴⁾。住宅価格の高騰が主な原因とみられているが、麻薬やアルコール依存といった旧来の課題のみでなく、「青少年層にみられる不平等、不公正への鬱屈、無気力化などが大きな問題」⁵⁾ と言われている。次節から詳述する Life Goals Foundation は、これらの層を対象にスポーツと福祉を結びつけた活動を行う先進例の一つと言えよう。

3. Life Goals Foundation (LGF)

3-1. Life Goals Foundation (LGF)

LGF は、「社会の隅に追いやられた社会的弱者を『スポーツ』を通じて統合する」(LGF, 2019) ことを目的に、キリスト教系の社会福祉法人「救世軍 (Salvation Army)」の支援を受けて 2010 年に設立された。図 1 に示すように全国 24 ヶ所に支部を持ち、各地で日常的な活動が行われているが、ユトレヒトにある本部では、①ストリートカップなどの大会の開催、②ソーシャルスポーツコーチ (Social Sport Coach: SSC) の育成、③ HWC への選手の派遣の 3 事業を中心に、各支部の活動のモニタリング、SSC の活動のフォローアップ、ブランディング・広報、政府機関を始めとした関係組織との連携などを 5 名のフルタイムスタッフが行っている。

全国 24 か所にある LGF の支部では、次節で詳述する SSC の研修終了後にライセンスを交付されたコーチを中心に活動が行われている。活動内容は、支部団体と SSC に任されており、その対象者は、アルコール・薬物等依存症者、元受刑者、DV 被害者、ホームレス、10 代の母親、精神障がい者など様々である。元々、各地で活動を行っていた青

少年育成や社会的弱者を支援する団体が、LGF の手法やサッカー、フットサルを活動に取り入れる際に LGF と支部契約を結ぶのが一般的である。LGF と契約し、ライセンス料を支払うと、1 年間、LGF のメソッドと教材を用いて活動を行うことが可能であり、「組織の構成及び内容は様々で、例えばホームレス関係であれば救世軍と一緒にやる、難民が多い場所では、別の支援団体がやっていたり、プログラムとして複数の団体が関わる場合もある。様々な組み合わせがあり、複数の団体が一つになり『ライフゴールズ○○○』という形でやっている」⁶⁾と説明される。2015 年～2018 年までの3年間で、全国で130以上の地域で活動が展開され、4,600人以上の社会的困難にある人に対してスポーツの機会が提供された。



図1 Life Goals Foundation の支部所在地（2019年1月現在）

出典：LGF ホームページ

もう一つの活動の柱である HWC への派遣選手は、支部からの推薦に基づいて決定される。サッカーの技術は不問であり、①チームワーク (Teamwork)、②コミュニケーション (Communication)、③将来への展望 (Path View)、④積極性 (Positivity)、⑤自信 (Confidence) の5つが選考基準である。各支部から選出された派遣選手は、本部のあるユトレヒトでトレーニングを受けるが、そこでは「負けを受け入れること」⁷⁾を重視したトレーニングが行われている。勝負には様々な「勝ち」「負け」の側面があり、試合に勝つことのみが勝利を意味するわけではない。態度やマナー、異文化理解などスポーツ参加によって得られる勝利以外の価値を選手自身が感じる事が重要であり、それを可能にする環境、時にはシナリオを作ることが LGF の役割と考えられている。すなわち、HWC は、勝利を目指して出場する LGF の活動の帰着点ではなく、個々の選手の学びの

ために LGF が提供する場のひとつという位置づけである。

設立当初の LGF は、他国の多くの NP と同様に、自分たちで活動を行い、チームを組織し、HWC に選手を派遣する団体であった。2015 年に第 13 回 HWC を開催したことから、それまでも一定の成果を上げていたことは明らかであるが、HWC を主催した後に活動実施団体から、啓発団体へと意識的に変革を試みた。活動地の拡大を目指して各地で大会を開催しているうちに「コーチの指導技術に差があることが分かり、レベルを合わせる必要性を感じた」⁸⁾ ことが最大の理由であった。ここでの技術とは、スポーツの技術ではなく、ソーシャルスキルの獲得を軸に個人の精神的な成長を促す指導の技術である。スポーツ指導と「一般福祉・健康関係 (General Health Care Institution)」⁹⁾ の両者を理解するコーチを育成することが急務であるとされ、次節に述べる SSC の育成に注力することとなった。

3-2. Social Sport Coach (SSC)

LGF は、2015 年より SSC の養成を目的に 4 日間の講習会を実施し、2018 年末までに約 350 名がライセンスを取得した。4 日間の講習は、独自に開発された表 1 に示す内容の教材を用いて対話型の形式で行われる。

表 1 テキスト “Social Sport Coach” の目次

プロローグ	体を動かす方が	自己評価・自己イメージの回復	定義付け
	ヘロインとメタドンの15年		環境がもたらす影響
	過去との決別		ソーシャル・スポーツ・コーチとして始めること
初めに	ライフ・ゴールズ奨励大使として	自己開発	個人が中心に
	社会におけるスポーツ		ゴールを設定
	ライフ・ゴールズとは		ロードマップ：成功へのたくさんの道
	ソーシャル・スポーツ・コーチとは		事例紹介
	ソーシャル・スポーツ・コーチになるにあたって		定義付け
	スポーツと社会参加		絆となる価値観
	ライフ・ゴールズの実践メソッド		楽しさと安全性
コーチとして	対象グループについて	成功への願い	自己肯定
	構造理解のためのワークブック		制限された自己肯定
	個人のリーダーシップ		スポーツと自己肯定
	自己理解		ソーシャル・スポーツ・コーチとして始めること
	リーダーシップの分類		ロードマップ：成功へのたくさんの道
社会的なふるまい	心の整理		事例紹介
	定義付け		
	文化		
	チーム文化をつくる		
	帰属意識		
	チームの局面		
	ソーシャル・スポーツ・コーチとして始めること		
	ロードマップ：成功へのたくさんの道		
	事例紹介		

講習では、スポーツ技術のコーチングには触れられず、対象とする選手の精神的ケアや成長、チームの一員としての役割の認識などを促す社会的コーチングの手法が教授される。表 1 に示されるように様々なアプローチが段階を追って示され、グループワークやアクティビティ、受講者同士のインタビューや対話などの方法が用いられている。1 回の講習の最低開講人数は 8 人であり、最大で 16 人を対象にオランダ語で行われている。受講料は、4 日間で約 13 万円であり、これまでにソーシャルワーカーをはじめとした福祉関係者、スポーツ指導者、様々な分野の NPO 関係者、学生、研究者など 350 人以上が修了し、2018 年末現在、その中の 113 人のコーチが国内 24 か所の支部で活動を行っている。

これまでの受講者は、女性 30%、男性 70% であり、「特に（活動の）ターゲットグループや連携団体が次のステップに進む段階でスポーツを取り入れたい場合に研修を受ける」¹⁰⁾ 傾向が強くみられる。



写真3 SSC講習の様子



写真4 日本でのSSC講習

4. 結果

LGF の SSC 講習を受け、実際に活動を行うコーチやマネージャー 15 名に対して半構造化インタビューを行った。主なインタビュー内容は、①個人的属性（年齢、所属組織、職業、学歴、職歴など）、②スポーツ歴（サッカー、フットサル以外を含む）、③コーチング歴（レベル、資格、実績、きっかけなど）、④ LGF の活動について（期間、活動内容、対象者、個人的利益など）、⑤スポーツと「社会的困難な状況にある青少年」に対する考え、の 5 点であった。

15 人の被調査者は、22 歳～ 50 歳で平均年齢は 36.9 歳であった。2 人が女性、13 人が男性であり、活動年数は最も長い者は 19 年、最も短い者は 2 か月であった。最終学歴は 5 人が高等学校、10 人が大学であり、予想に反して競技サッカーを行っていた者は 5 人のみであった。その他の者は、ラグビー、ハンドボール、バスケットボールなどの経験者であり、複数種目の経験者も数名みられた。本章では、被調査者の語りから LGF の活動の具体的な成果の検討を試みる。

LGF の SSC の多くは、国の代表から地方大会の出場のみ、とレベルは様々であるものの競技スポーツの経験を有しており、またコーチとして競技力の向上を目指して指導に当たっていた者がほとんどであった。彼らは、指導を行う中で薬物やアルコールの依存症やホームレス状態にある人々への対応に困難を感じたり、競技力向上のみではないコーチングの必要性を感じたりといった理由で SSC のライセンスを取得していた。SSC が目指す「社会的なコーチング」の意義を尋ねたところ、「場」としてのスポーツの存在に関する語りが聞かれた。

私の地域には、無職であったり、ドラッグに依存している青少年が沢山います。彼らが、「朝起きて日中は起きている」「外に出てやることがある」という状態を作るためにスポーツの機会を提供しています。

(W 氏、43 歳、男性、コーチ兼コーディネーター)

スポーツ活動の後には、皆が一緒にお茶を飲んだりして話す場を設けています。その場でツーリングや映画に一緒にでかける計画を立てるなど新しい友人ができることがとても重要です。

(M 氏、22 歳、男性、コーチ)

私たちの行っている活動の中では、選手同士の言い合いや小競り合いが良く起きます。それ自体は仕方がないことですが、上手く場を治めること、より選手たちにストレスがかからない方向に持っていくことが重要です。

(J 氏、24 歳、男性、コーチ兼コーディネーター)

ここで強調されたのは、一般的なスポーツに見られる競技力向上を一切志向しないスポーツの存在である。スポーツの場に参加すること自体が価値を有しており、そこでの技術習得や能力向上が目指されていないため、この点のみを見るとスポーツではない別の活動でも同様の価値が見出せそうである。生活を整える、外に出る、友人を作るといった一見、容易にも見える選手個人の変化が認められており、第一段階としてこれらの個人的な変化が起こること、またそれらが積み重ねられていくことが重要とされている。これらの個人的な変化に加えて、他者との関係を築くことも成果として認められている。

スポーツの場に参加するだけで、新しい人との出会いがあります。始めは審判や他の選手の話を見聞かず自己中心的にふるまっていた人が、「他者」の存在を意識し始めて少し穏やかになります。[他者の存在は] スポーツを楽しむためには重要な要素です。

(T 氏、31 歳、男性、コーディネーター)

選手たちは、競技力が高い者もそうでない者もコーチに見て欲しいと思っています。全ての選手たちが、見て欲しい、聞いてほしい、尊重して欲しいのです。私はコーチとしてあなたは他の人たちと何も変わらない、重要な存在であるということを示す必要があります。

(J 氏、43 歳、男性、コーチ)

ほとんどの少年、少女は、好きなスポーツが一つはあります。そのスポーツによっ

て、自分は「逃げることができる」「プライドを持つことができる」と気づきます。また、グループの中で自分に役割があり、受け入れられていると感じます。

（K 氏、50 歳、男性、コーチ兼ソーシャルワーカー）

他者との関係性については、「新しい友人」と表現されるように参加者相互のものを指すと推測していたが、調査の中では、選手同士のみでなく、審判、コーチ、団体のスタッフなど様々な属性や立場にある人々との関わりも重視されていた。調査結果からは、被調査者であるコーチが、自分自身と各参加者との関係に留意している様子が窺われ、また、それぞれの参加者が、他者との関係性を認知することで自尊心を得たり、社会の一員としての認識を高めていったりする様子が窺われた。他者との関わりを生む媒体としてのスポーツの価値は、スポーツ基本計画において「継続してスポーツを『する』ことで、勇氣、自尊心、友情などの価値を実感するとともに、自らも成長し、心身の健康増進や生きがいに満ちた生き方を実現していくことができる」（文部科学省、2018）、と示されている。他者との関係性が日常の一部になるにつれて、実際の社会においても活用可能なライフスキルを身に付けたり、社会そのものを理解することが可能となる。近年、「リーダーシップや目標設定、コミュニケーション能力の向上や感情の抑制といったライフスキルがスポーツ参加を通じて獲得されることが複数の研究で示されている」（Johnston, Harwood, & Minniti, 2013; Jones & Lavalley, 2009）と示されるように、スポーツ参加による様々なライフスキルの獲得が成果として示されている。

萩原（2013）は、ソーシャルサポートとスポーツの継続、習慣化の関係を明らかにした上で社会心理学的評価を行い「競技者自らが積極的にチームメイトにサポートを提供することが、競技者としての役割を自覚させ、競技実施行動を促進するというプロセスは有益（中略）競技者自身が積極的にかつ自発的に競技スポーツに関わるソーシャルサポートをチームメイトに対して行うことを指導者やコーチが促進することが求められる」（萩原、2013）と述べており、他者との双方向の関係性がスポーツ実施の際に重要な意味を持つことが示されている。双方向の関係性について「スポーツと社会化」に関する議論においても「当初の理論では社会化される個人（Socializee）が社会化の担い手（Social Agent）から一方的に影響を受けるだけの存在とされていることへの批判から、近年では、社会化される個人を主体的・能動的に捉える」（吉田、1992）と説明される主体的社会化論が広く用いられている。

活動に参加することによって、青少年は自分を表現するポジティブな方法を学びます。彼ら彼女らの多くは、自分を表現する方法、他者を尊重し上手くやっていく方法を知りません。社会を生き抜くためのシンプルな法則を身に付けることで、自信をつけ、自分を表現することができるようになります。

（J 氏、45 歳、男性、コーチ）

困難な状況にある多くの青少年は、社会がどのようなものかを知りません。スポーツをすることで物事がどう周っているのか、時間の流れ、ルールや仕組みなどを理解し、より良い社会人になるのだと思います。

(M 氏、37 歳、男性、コーチ兼地区マネージャー)

様々な課題を持つ青少年もスポーツをすることでコミュニティに参加し、社会化されます。彼ら彼女らに困難や悲しみがあつた時、クラブに所属していれば、コーチやチームメイトに話すことができます。私は彼ら彼女らに第二の家族、新しい家族を作りたいと思っています。

(C 氏、46 歳、男性、コーチ兼マネージャー)

スポーツへの参加によって社会化されると人は精神的に安定します。人生の中で孤独を感じない、人々の輪の中に入るということがとても重要です。

(M 氏、22 歳、男性、コーチ)

主体的社会化論では、「日常的（ルーティンの）な状況よりもむしろ、問題的な状況でこそ主体性が発揮されるとされている（中略）先行知見においても、困難の克服や挫折からの立ち直りと言った問題状況に対峙した際の主体性発揮には他者の働きが重要であることが示唆されている」（新見、2018）と示されている。SSC が行うスポーツ活動では、様々なトラブルや諍いが起きているが、これらは歓迎すべきことであり「トラブルがひとつも起きない場合は、コーチの方から仕掛ける場合もある」¹¹⁾とさえ言われている。SSC への聞き取りからも参加する青少年が主体的に社会化されていった様子がうかがえ、また、その場に立ち会うことこそが SSC の仕事の醍醐味との認識も見られた。

私は、SSC は最も美しい仕事だと思っています。人が変わるところ、いい方に変化するところを直接見るからです。人はいつでもどの方向にも向かうことができるということを学んでいます。

(C 氏、46 歳、男性、コーチ兼マネージャー)

このような SSC の有効性に対する評価が多く聞かれたが、一方で、SSC の行うスポーツ活動をあくまでも団体の活動の「一部」に位置付けている団体も見られた。

スポーツは強力な手段です。楽しいですから。しかし、社会的弱者である青少年へのアプローチの手段として「スポーツ」が単独で使えるわけではありません。他のプログラムの中で学んだこと、例えば「自己管理」といったことを実践してみる場としての意義があります。

（T 氏、29 歳、男性、マネージャー）

SSC 研修を提供する LGF は、団体設立当初は HWC への出場を目指して活動を行っていたが、後に HWC を活動の一部と位置づけ、活動の主軸を SSC の養成へとシフトしていった。上述の T 氏が所属する団体では、SSC によるスポーツ指導を活動の一部としており、ここでは HWC の出場についてはほとんど意識されていない。すなわち、HWC の理念は受け継がれているものの、HWC という大会の存在は極小化されており、見方を変えれば、そのトレードオフとして対象者の範囲を拡大したとも言える。現在、オランダ全土で SSC が行うスポーツ活動の参加者は様々な背景を有しており、かつて LGF が、選手が HWC に参加したことをきっかけに、住居を得る、職を得る、収入を得ることを目指していた頃とは様相が変わっている。例えば、元受刑者が起業し、同じ背景を持つ者を雇用したり、ドラッグ依存から抜け出しソーシャルワーカーとして働いたり、ホームレス状態から脱した後にホームレス支援の団体で働いていたり、LGF の活動の帰着点にも広がりが生まれている。自分自身のゴールへの帰着後に LGF の活動をボランティアで手伝う者も多く、画一的ではないゴールの設定とそこに行きつく道程の多様性が LGF の活動の特徴と言えよう。

5. おわりに

LGF の活動を現場で担う SSC への聞き取りから、LGF が行う関連活動の様々な成果が考察された。調査の開始当初に LGF の本部スタッフに「具体的な成果」を尋ねたところ、職を得て働いている者がいる、家族との関係性を修復した者がいる、社会的に活躍している者がいる、といった個別の話は聞いたものの、LGF の活動の全体像をイメージすることが困難であった。そのため、複数回オランダに通い、時には専門家の話を聞きながら、近年のオランダ社会の変化やスポーツ事情、中でも CSCs の広がりや人々の生活との密着度に関する理解を深めていった。オランダは、ユニセフの 2013 年の調査で「子どもの幸福度のランキング」が世界一となった国である。ワークシェアリングや同一労働同一賃金を広く採用し、教育・福祉の地方分権化を進め、安楽死法や同性結婚法を成立させるなど、先進的な政策を採る国としても知られている。しかし、かつては欧州地域で女性の就業率が最も低く、1970 年代には「オランダ病」と称された経済不況に直面し、そもそも運河に囲まれており自然災害（水害）が頻発する国であった。少子化と高齢化への対応から福祉関連予算が膨れ上がった時期があり、長い経済不況も経験している。これらの避けられない変化に対応した結果、社会が大きく変容しており、その中で生まれた社会的困難を抱える人々の課題を社会全体の課題として捉えなおし、官民一体で取り組もうとしている。新しい福祉国家を形作ろうとする際に「スポーツ」を強力なツールとして活用しようとする動きがあり、LGF は、正にオランダ社会の現代的要請に応え

る形で発展を続けてきたと言えよう。

調査を進める中で、職や収入を得る、ホームレス状態から脱却する、様々な依存症を克服するなどの成果が見られたが、これらの成果は「個人の変化」と「人間関係の変化」に集約されているようであった。目に見える成果としては様々なパターンがあり、それは現代のオランダ社会の「成功モデル」にも幅があることに起因しているように思う。個々人の幸福の形が多様であるゆえに、本章の始めに示したような一般的かつ「具体的な成果」を示すことが困難であったと推測される。

個別の具体的な成果を示していくことは、他の HWC への参加国の例からも有効であり、LGF でもアイコン的な存在の「元選手」による分かりやすいメッセージの発信を推し進めている。それは、団体の広報の意味を有するとともに、現在、LGF の活動に参加している者、これから参加しようとする者、SSC や SSC になろうとする者たちに対して可能性を確信させるロールモデルとしての意義を持っている。SSC の養成というパッケージ化された事業を持つ LGF の理念と手法は、その帰着点は多様であるものの社会の変化に対応し得るものであろう。今後も長期的に LGF の活動を追い、社会の変化に呼応しながら発展する LGF と SSC の理念の広がりを検証してみたい。

注

- 1) LGF の本部スタッフ Schaling 氏に 2017 年に行ったインタビュー調査より。
- 2) Utrecht 大学の Hermens 氏に 2017 年に行ったインタビュー調査より。
- 3) LGF の本部スタッフ Jagar 氏に 2018 年に行ったインタビュー調査より。
- 4) 欧州のホームレス問題を扱う NGO である FEANSTA の HP より。
<https://www.feantsa.org/en> [2019/08/20]
- 5) Utrecht 大学の Hermens 氏に 2017 年に行ったインタビュー調査より。
- 6) LGF の本部スタッフ Schaling 氏に 2018 年に行ったインタビュー調査より。
- 7) 同上
- 8) LGF の本部スタッフ Jagar 氏に 2018 年に行ったインタビュー調査より。
- 9) LGF の本部スタッフ Jagar 氏に 2018 年に行ったインタビュー調査より。
- 10) LGF の本部スタッフ Schaling 氏に 2017 年に行ったインタビュー調査より。
- 11) LGF の本部スタッフ Schaling 氏に 2018 年に行ったインタビュー調査より。

謝辞

本研究の実施にあたり、Wageningen 大学の MSc. Niels Hermens、Utrecht 大学の Dr. Frank van Eekeren、内田順子氏、加朱将也氏、上向井千佳子氏、川上翔氏、笹倉慎吾氏、鈴木万紀子氏、竹内祐一氏に多大なご協力をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP15H03071 の助成を受けたものです。

文献表

- Bosscher, D. V., Shibli, S., Westerbeek, H., and Bottenburg, M. V. (2015) *Successful Elite Sport Policies: An International Comparison of the Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success (SPLISS 2.0) in 15 nations*, London: Meyer & Meyer Sport Ltd.
- Hermens, N., Super, S., Verkooijen, K. T., and Koelen, M., A. (2017a) A Systematic Review of Life Skill Development through Sports Programs Serving Socially Vulnerable Youth. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, Vol. 88, No.4, pp. 408-424.
- Hermens, N., Langen, L., Verkooijen, K. T., and Koelen, M. A. (2017b) Co-ordinated Action between Youth-care and Sports: Facilitators and Barriers. *Health and Social Care in the Community*, Vol. 25, No. 4, pp. 1318-1327.
- Johnston, J., Harwood, C., Minniti, A. M. (2013) Positive Youth Development in Swimming: Clarification and Consensus of Key Psychosocial Assets. *Journal of Applied Sport Psychology*, Vol. 24, pp. 392-411.
- Jones, M. I., Lavalley, D. (2009) Exploring Perceived Life Skills Development and Participation in Sport. *Qualitative Research in Sport and Exercise*, Vol. 1, pp.36 -50.
- Super, S., Verkooijen, K. T., and Koelen, M., (2018) The Role of Community Sports Coaches in Creating Optimal Social Conditions for Life Skill Development and Transferability: A Salutogenic Perspective. *Sport, Education and Society*, Vol. 23, No.2, pp. 173-185.
- NOC*NSF (2016) Sport agenda 2016. Netherland NOC/NSF,
<http://www.nocnsf.nl/cms/showpage.aspx?id=10980> [2019/03/05]
- 萩原悟一 (2014) 「スポーツ・コミットメント形成モデルの構築ーソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティーの関連を基軸としてー」九州工業大学大学院博士論文 <http://hdl.handle.net/10228/5309> [2019/9/24]
- 新見尚行 (2018) 「大学生アスリートの主体性構造に関する探索的研究」 *教養研究* 第 25、第 1 号、P.1-17.
- 文部科学省 (2018) スポーツ基本計画、文部科学省 HP
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm
 [2019/08/25]
- 山口志郎、山口泰雄、青山将己 (2016) 「オランダにおけるスポーツ政策と子どものスポーツ振興プログラムに関する事例研究」 *生涯スポーツ学研究*、第 3 巻第 2 号、P.63-74.
- 吉田毅 (1992) 「スポーツ社会学における社会化論の一視覚ー主体性をめぐってー」 *体育学研究*、第 37 巻第 3 号、P.255-267.

Initiatives for poverty reduction through sport in the Homeless World Cup III: The case of the Netherlands

Chiaki OKADA

The Homeless World Cup (HWC) is an international futsal event in which homeless people can participate. Over 500 players annually are sent from over 60 countries by national partners (NPs) that conduct daily team activities and selections. Life Goals Foundation (LGF) is an organization established in 2010 in the Netherlands that aims to help vulnerable people on the edges of society integrate through sports. The foundation provides special sports programmes for people who have faced major negative life events (LGF's webpage). One of the distinctive features of LGF is its Social Sport Coaches (SSCs): LGF operates sport programs at 24 venues in the Netherlands under the supervision of specially trained SSCs.

I conducted semi-structured interviews with a total of 15 SSCs, mainly in English (Dutch ↔ English for two persons). These interviews were held in December 2018 and lasted an average of approximately 26 minutes each. The key themes of all interviews were: 1) background information, 2) sport careers, 3) coaching careers, 4) activities as an SSC, and 5) opinions on the combination of sports and vulnerable youth. Prior to these interviews, I held pre-interviews with the staff members of LGF in 1) 2017 in Oslo, the venue of the HWC of that year, 2) 2018 in Utrecht, and 3) 2018 in Osaka.

We noted several outcomes/contributions of LGF's and SSCs' activities from our conversations with the interviewees, as well as successful examples in particular of proactive socialization through commitment to sport activities. LGF seems not to set the typical and usual successful goals based on an ideal model of participation in their activities, but tries to accept each participant's circumstances and sets goals according to each person's needs. Although the LGF's activities are officially supported by government policies and budgets, the concept of the SSC itself has limitless potential for poverty reduction through concrete sports achievements.